

俳句

にしおきとう
西尾其桃

下関市
(1868～1931)



【著作】
句集『其桃集第一輯』
『俳諧式二考』

(文・中村石秋)

西尾其桃は明治元年（一八六八）播州明石郡垂水村奥畑の清水家に生まれ、名は弥三郎。幼い頃、漆山の西尾家の養子となったが、父徳平は雜俳の大家として知られていた。因縁は既に俳句にあったと言うべきであろう。一三・四歳の頃、檀那寺の潮海寺住職の三千堂清月老師に素読の傍ら、発句を学び始めた。清月老師は西尾少年を可愛がり「我亡きあとは三千堂を継ぐべし」と常に申されていたのでその遺言を守った。一七歳の折、医者を目指して長崎に行く途次、下関のある医家に足を止める事になり、長門古市の内藤呉竹楼医師のもとで書生として指導を受け、蔵小田で開業した。明治二十一年（一八八八）、二〇歳の折、医学勉強の為、大阪に行き、更に東京への勉学の合間に句作にうき身をやつした。京都に居た時美濃の大震災があり救護班の組織の下に岐阜県に行った。その折、柳庵一瓢・帯経庵碌々という老宗と識り美濃風の俳諧を学んだ。其の間大津郡俳壇で活躍。不老窟三世波多野桃二の文台を継承して第四世を襲名。美濃派俳諧を広め指導的役割を果たした。明治三十六年（一九〇三）、下関に移った後も美濃派の研鑽を続けていたが、明治三十九年（一九〇六）、再び上京して、貴族院議員森山鳳羽の門下に入り、正風の俳諧を学びつつ、下平可都三・穂積永機・羽洲・石芝・清美等の老宗匠とも交流する。日頃、鳳羽師の「私の死後は露城に就いて指導を受けよ」という言葉に従って無名庵露城に師事する。大正九年（一九二〇）、日置村の高村桃甫に永春庵の号とともに、獅子庵所伝の文台、伝書一切を譲って、最初の師三千堂清月の志を受けて、三千堂を名乗ることにした。やがて無名庵露城が逝き、露城は生前に、後継者を其桃に決め、人にもしばしば漏らしていたが、其桃は先輩である霞遊師に十六世を譲った。其桃は無名庵に入庵直前に紀州白浜で肺炎のため死去した。其桃門下第一人者寺崎方堂は恩師其桃を無名庵十七世主人と追号し、自分は十八世となった。辞世句「子の血汐都の花を見すべきや」。

昭和七年（一九三二）、日和山公園に句碑建立。《春の日のきらめく蘭の葉尖哉 三千堂其桃》桃支は追悼句集『子の血汐』発刊。『其桃集第一輯』『俳諧式二考』の著書がある。



大津義仲寺句碑（滋賀県）



日和山公園句碑（下関市）

西尾其桃 年譜

（提供・中村石秋）

1月18日、播州明石郡垂水村（現・神戸市垂水区）奥畑の清水家に生まれ、名は弥三郎。幼い頃、同郡漆山の西尾家に養われた。父徳平は雜俳の大家。

檀那寺の潮海寺住職の三千堂清月老師に素読の傍ら、発句などを学ぶ。清月老師は「我亡きあとは三千堂を継ぐべし」と常に悟した。

医を志し、長崎に行く途次、下関の医家に足を止め、長門古市の内藤呉竹楼医師のもとで書生として指導を受け、蔵小田で開業した。

医学勉学の為、大阪更に東京へと出京。美濃の大震災の救護班として岐阜県へ出向く。その折、柳庵一瓢・帯経庵碌々等の美濃風の俳諧を学ぶ。爾来大津郡俳壇で活躍。不老窟三世波多野桃二の文台を継承して第四世を襲名。美濃派俳諧を広め、その指導的役割を果たした。

永春庵其桃と号した。

下関に転出。
再び上京して、貴族院議員森山鳳羽の門下に入り、正風の俳諧を味わう。下平可都三・穂積永機・羽洲・石芝・清美等の老宗匠とも交流が始まる。鳳羽は、無名庵十五世瀬川露城の師であり、鳳羽没後（大正八年）は、露城に師事する。

日置村の門下高村桃甫に永春庵の号とともに、獅子庵所伝の文台・伝書一切を譲って最初の師、三千堂清月の志を受け、三千堂と名乗る。
下関に移住していた其桃らの発起によって、人丸神社境内に句碑が建てられた。其桃の師である不老窟三世波多野桃二の句碑を中にして右側に其桃、左下に氷姿園の句碑三基が立っている。

此の除幕式に際し、美祢・豊浦と地元三郡の俳人達が出席して一日一百韻を盛大に興行した。この頃が美濃派の最盛期である。

6月28日、句文集『其桃集第一輯』発刊。序・跋には徳富蘇峰・小野櫻山・伊藤松宇・名倉尺城・賛川他石と当時の旧派の大家が寄せる。此の書は還暦記念であり、其の他『俳諧式二考』を発刊。

4月8日、和歌山県白浜にて肺炎の為、死去。戒名三千堂独醒庵其桃居士。其桃門下第一人者寺崎方堂は恩師其桃を無名庵第十七世主人と追号し、自分は十八世となった。
辞世句 子の血汐都の花を見すべきや

4月10日、西尾桃支は下関市日和山公園に句碑を建立。盛大な除幕式挙行。

春の日のきらめく蘭の葉尖哉 三千堂其桃

9月、西尾桃支により其桃の追悼句集『子の血汐』が刊行された。

陽炎やうしろ山まで砂白き

（和歌山県白浜温泉句碑）

鶯の頻に鳴くや雨の花

（大津義仲寺句碑）

おもふこと皆からひけり秋の風

（山口県人丸神社句碑）

落葉よせて蟹のなきがら埋めけり

（山口県油谷町句碑）

鶯のつたふおとするまかきかな

（神戸市摩耶山句碑）

神もあとたれて千歳に月かなし

（下関市赤間神宮句碑）

春の日のきらめく蘭の葉尖哉

（下関市日和山公園句碑）

音立て、なかる、潮や青あらし

（下関市小門報濟園句碑）

小春日や猿の来て掬むいそ清水

（山口県仙崎青海島句碑）

〈句集『其桃集』第一輯
昭和5年6月28日発刊
発行者 西尾弥三郎（三千堂其桃）〉